



須恵器 大甕 (すえき おおがめ)

制作年代は、奈良時代末期から平安時代初頭と考えられます。

口径 52.6 cm、器高 105.0 cm、

最大胴部径 107.8 cm (底部から65.9 cmの地点)

容量 522.6ℓ です。

肩は外に大きく張り出し、丸底です。外面には、<sup>こうしめ</sup>格子目状のタタキ目が全体に見られ、内面には同心円状のあて具の痕が明瞭に残っています。

胎土は灰白色を基調とした良質なもので、1 mm以下の石英・長石・チャートを含み、焼成は良好です。粘土紐を積み上げ、タタキ技法で作られ、これは、須恵器甕の基本的な作り方です。

出土地は桂川と宇治川が合流する中洲先端部分で、河床に埋まっていたところ、平成6年に付近で野外調査を行っていた地域住民によって発見されました。上流には「<sup>やまさきのつ</sup>山崎津」推定地があり、平安時代には港として栄えていたとされています。当時荷物を集積した船が、大阪湾から淀川をさかのぼり、都城域へと物資が運ばれていたことから、近くに物資輸送の中継地でもあった港が存在したものと推定されます。

大甕の産地は、大阪府南部の「<sup>すえむらようせきぐん</sup>陶邑窯跡群」あるいは、その影響下にあった播磨から備前にかけての諸窯、また、尾張、もしくは美濃を中心とした東海諸窯の可能性もあり、窯の特定は現段階では難しいといえます。

古代の大甕は、大量の液体等を貯蔵する容器として、日常生活では重宝されたと考えられています。また、容量500ℓを超えるものは、都城域での需要が高く、酒造りや藍染め等の手工業生産では必需品であったと考えられます。

淀川河床から出土したことは、重量のある大甕が淀川を経由し、水路で平城京、長岡京、平安京などの都城域に運ばれたことを示していて、このような大型品は陸路で運ばれたのではなく、水路で運ばれたことを示す資料として重要です。

ほぼ完形品と言える古代大甕の例は、伝世品として<sup>いそのかみじんぐう</sup>石上神宮所蔵の大甕（奈良県指定文化財）や、近年出土した長岡京右京八条二坊二・六・七町出土資料などが知られています。大阪府内の諸遺跡からの出土例にも同等のものがほとんど知られておらず、全国的にみても類例の少ない希少なものです。古代の都への交通路や運搬経路を知り、都との関連の深い本町の歴史を理解する上では極めて重要な考古資料なのです。



平成27年4月1日に町指定文化財の第6号に指定しました。

<用語解説>

※タタキ技法

丈夫な器にするため、叩き木と当て木の内と外から叩きながら成形する技法。

島本町立歴史文化資料館